

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	下野 玲子
論文題目	敦煌仏頂尊勝陀羅尼經変相図に関する研究
<p>審査要旨</p> <p>下野玲子君の学位請求論文「敦煌仏頂尊勝陀羅尼經変相図に関する研究」は、中国敦煌莫高窟の現地調査にもとづく研究成果である。莫高窟第 217 窟南壁の壁画が仏頂尊勝陀羅尼經の変相図であることを発見し、さらにこの壁画の典拠となった『仏頂尊勝陀羅尼經』の伝播に関しても解明した斬新かつ意欲的な研究である。</p> <p>本研究は序論、第一部「唐代敦煌莫高窟の仏頂尊勝陀羅尼經変相図」、第二部「仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』に関する諸問題」、第三部「敦煌法華經変相図の再検討」の三部構成で、その内容を列挙すると第一部は、第一章「莫高窟第 217 窟南壁の仏頂尊勝陀羅尼經変相図」、第二章「莫高窟における仏頂尊勝陀羅尼經変相図の展開」、第三章「莫高窟第 217 窟の供養者像と制作年代」となる。また第二部は、第一章「仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』の経序に関する問題」、第二章「唐代前紀および奈良朝の仏頂尊勝陀羅尼」、第三章「利本大蔵經における仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼』の変遷」である。最後の第三部は、第一章「莫高窟隋代第 420 窟法華經変相図の再検討」、第二章「莫高窟唐代法華經変相図の再検討―第 23 窟壁画の位置付け―」、第三章「吐蕃支配期以降の敦煌法華經変に関する一考察」となっている。</p> <p>下野君は本研究の最重要部をまず第一部で論じる。すなわち第一部は莫高窟の仏頂尊勝陀羅尼經変相図の図像分析と年代に関する研究である。</p> <p>第一章は従来唐代の法華經変相図の代表作とされてきた第 217 窟南壁の壁画が、図像の詳細な観察と仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』の内容を逐一検討した結果、『仏頂尊勝陀羅尼經』の変相図であることを発見した画期的な研究である。仏坐像を取り巻く三本の白線の発見は本図の主題を特定する大きな根拠となっているが、美術史研究の基本というべき観察力があればこそその発見であった。大いに評価したい。また当經典にのみ付属している序文の取經伝説が画面右に描かれていることを明らかにし、同類經典五点中、仏陀波利訳がもっとも流布したという信仰状況に本図が合致することも指摘する。</p> <p>つぎに第二章では、第 217 窟南壁の壁画と同じく法華經変相図とみなされていた第 103 窟南壁、第 23 窟窟頂東面、第 31 窟窟頂東面の壁画を観察し図像分析をおこなった結果、いずれも『仏頂尊勝陀羅尼經』を圖像化したものであることを明らかにするのである。さらに第 217 窟がもっとも經典に忠実で、詳細に圖像化され、第 103 窟、第 23 窟、第 31 窟と時代が降るほどに構図や場景の数が簡略され、第 31 窟は密教信仰の影響が強くみられることを明らかにする。</p> <p>第三章では、莫高窟第 217 窟の造営年代を 8 世紀初頭とする従来説の根拠、つまり同窟西壁の供養者像題記について再検討する。現地調査の観察により現存の供養者像が描き直されていることを発見し、その様式年代が同窟の他壁面の図像より降ることから、供養者像題記を根拠に窟の造営年代を決めることはできないと主張。しかし供養者像以外の壁画の様式からすると、同窟は従来どおり 8 世紀初頭ごろの造営と位置づける。</p> <p>つぎに第二部では『仏頂尊勝陀羅尼經』に関する問題を取りあげる。</p> <p>第一章では、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』の経序に関する問題点を整理し、仏陀波利訳とその類似經典の訳出年代について再確認する。経序によると僧志静が改定した陀羅尼を経末にさらに付加したはずであり、経序付きの仏陀波利訳経にはもともと経文中の陀羅尼のほかにも経末にも陀羅尼があったはずだが、経末に陀羅尼が付加されているテキストがのこっていないという指摘は肝要である。</p> <p>つづく第二章では、多くの異本が伝来する仏頂尊勝陀羅尼について、中国唐代前期と奈良朝における諸本の系統分類をおこなう。従来少数の研究者しか言及しなかった高野山正智院蔵の天平十一年(739)写經</p>	

を重視し、この正智院本を経序、経文、経中の陀羅尼、経末の陀羅尼がすべて完備した現存唯一の仏陀波利訳正統本と評価し、二種の陀羅尼がそれぞれ別の訳者の陀羅尼に一致することも提示する。その結果、藤枝晃説に同意し、現行の杜行顛訳と地婆訶羅第二訳の經典の陀羅尼は、後に仏陀波利訳の陀羅尼に入れ替わったと結論する。

第三章では、仏陀波利訳の尊勝陀羅尼が他の訳者の陀羅尼と混乱している問題について、刊本大蔵経から解明を試みる。最初の刊本大蔵経である北宋の開宝蔵とそれを継承した金蔵では、仏陀波利訳、杜行顛訳、地婆訶羅第二訳の三經典の陀羅尼が互いに錯綜し、高麗蔵再雕本ではその混乱を正そうとして契丹蔵のテキストを採用し、これが『大正新脩大蔵経』に収録されたことを明らかにする。こうした混乱は7世紀末から陀羅尼の改変が繰り返され、多くの系統が流布したことの反映と論じる。

第三部は莫高窟の法華経変相図の四例を仏頂尊勝陀羅尼経変相図とする画期的な見解を発表したため、あらためて莫高窟の法華経変相図全体について再検討を試みる。

第一章では隋代の莫高窟第420窟の法華経変相図の画面半分は涅槃経変相図とする見解を提示し、第二章では盛唐期の第23窟壁画は次なる吐蕃支配期以降に定形化する法華経変相図のプロトタイプに位置づけられると論じ、第三章は吐蕃支配期の法華経変相図のうち、獣・地獄などの図像が法華経譬喩品にもとづく謗法罪報であり、また初転法輪と涅槃の図像が方便品の重要思想にもとづくことを明らかにする。

以上野君の研究は、敦煌莫高窟の第217窟南壁の壁画が『仏頂尊勝陀羅尼経』の変相図であることを発見したことにはじまるが、この発見は莫高窟変相図研究における最大のものである。さらに尊勝陀羅尼の伝播に関する問題についても注目すべき見解を提示している。こうした図像と經典の研究は、美術史学は実物作品と文献史料を車の両輪のごとくして成立するという會津八一の研究理念を実践したもので、その成果はきわめて大なるものであると認める。本論文が博士(文学)の学位に相当するものであると判断する。

以上

公開審査会開催日	2013年 1月 9日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	大橋 一章
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	大久保 良峻
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	内田 啓一